



秋の深まりを感じつつ、比叡山では10月5日から6日にかけて、4年に1度の天台宗最重要法義「別請廣学豎義」が大講堂で厳修された(写真手前から清原恵光擬講大僧正、奥へ山田能裕探題大僧正、堀澤祖門已講大僧正。詳細は3面に掲載)



発行所
比叡山時報社
〒520-0116 大津市坂本本町4220
郵便番号 520-0116
電話 077-578-0001
振替 00970-2-9732
宗教法人延暦寺事務所
定価 1部110円 年1200円

延暦寺広報

叡山講福聚教会
会報
年会費(3000円)中
に会報(比叡山時報)
購読料を含む。

令和4年比叡山から
発信する言葉
大悲
万行
すべての行いは大悲から

ホームページから



ご購読は延暦寺

秋を迎え考える

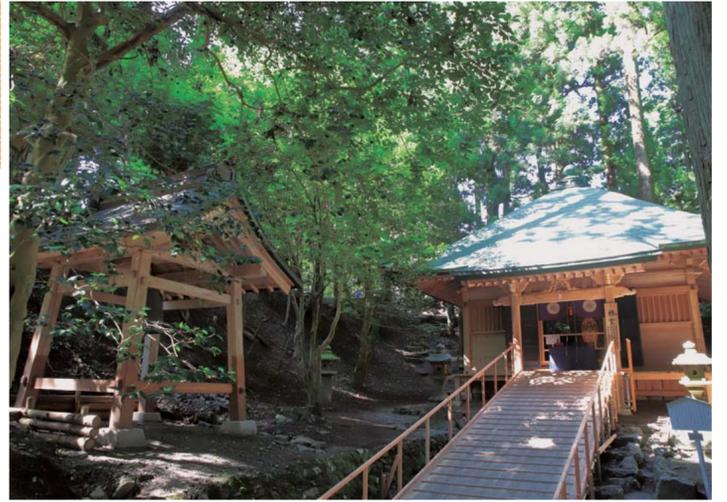
秋分の日を過ぎましたが暑さはいまだ変わらず、しかしふと耳を澄ますと、ひぐらしの鳴き声が大きく聞こえてくるようになりました。田畑の様子も太陽の日差しを受けて育った稲の穂先が次第に黄金色に輝き始め、成長期(生長期)から成熟期(収穫期)へと変わりました。実りの秋、時節の移り変わりや成長を目の当たりにした時、ふと我に返って考えさせられます。

私たち人間はこの地球上において、それぞれ一つの人格体として生を営み、生きています。一般的に父、母、兄弟、姉妹という家族構成の一員として生を享け、そして、学童期・青年期と学校生活を経て多くの友人、先生との関わりの中で様々なことを学び、次いで社会に出れば社会の一員として生きています。生を営む場は昔に比べ、近年著しく発展し拡大されました。個々の生の営みとは言えど、社会の中で他者と関わりあい、みんな生きていくわけであり、共に生きていくのです。

人間が生きているということは、多くの因縁によって生かされているということです。私たちは父母、祖父母によって与えられたものであり、遠い過去の因縁があつてこそ、今、ここに生きているわけです。また、忘れてはならないのは、人間をとりまく自然環境です。すべての生物は、太陽の光や熱、水や空気なくしては生きてゆけません。私たちは自分を取りまく家族、友人、社会、自然環境との関わり因縁によって生かされていることを知り、自然と人間との共生を深く考えなければなりません。

人が生きているということは自らの生を大切に生きていくことはもちろんのこと、みんな支えあい、共に生きていくことを念頭に置く必要があります。私たちは他との関わりの中で自分自身をみつめ、更には各々を尊重しながら生きていく。同様に地球上にいる生物は人間だけではないことを十分に理解し、他者を慈しみ、自然への敬愛を大切にして生きていくことを再認識するべきではないでしょうか。

比叡山秋の特別行事



秋の檜堂は群生する檜の柔らかい木漏れ日に照らされる

伝教大師開創前の比叡史

日本最古の漢詩集『懐風藻』(751年成立)には、近江は惟れ帯里(比叡)に、神山(比叡山)は雲に山静けくして俗塵寂み谷間けくして眞理専らあり、於穆しき我が先考(亡父)獨り悟りて芳縁を聞く云々、詩の中に見えるよう

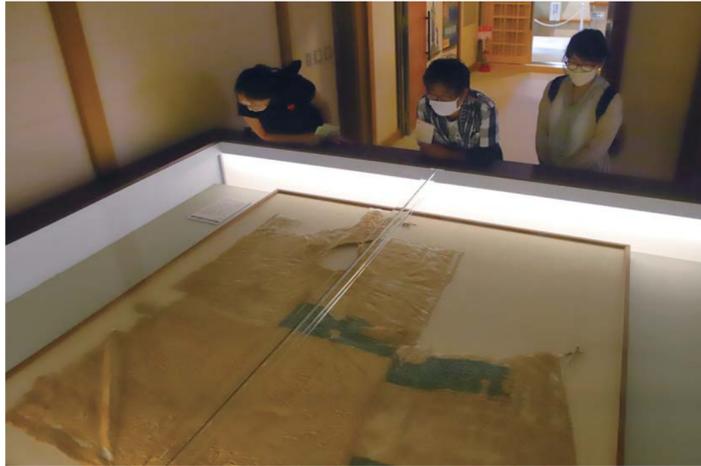
伝教大師一千二百年大遠忌 聖徳太子一四〇〇年御遠忌 比叡山国宝殿開館三〇周年

三つの記念の年、得難き勝縁 檜堂特別御開扉と「比叡の霊宝」展を開催

比叡山延暦寺に伝える宗祖の願い

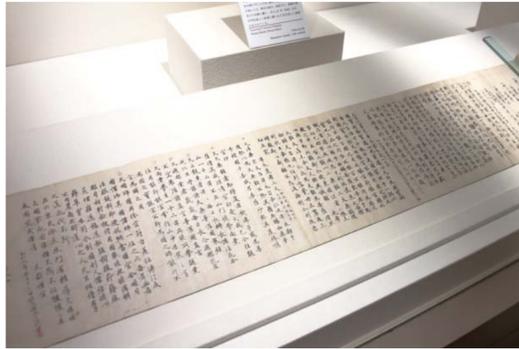
「比叡の霊宝」12月4日(日)まで開催中

比叡山国宝殿とは、比叡山国宝殿は延暦寺書をはじめ、比叡山山上内にある貴重な文化財として伝承されてきた仏像・絵画・書跡など国宝を管理、保存するための重要文化財を含む多数の寺宝が収蔵されています。構造は鉄筋コンクリート造りの3階建て延べ床面積は約1053平方メートル、館内に宝館の老朽化に伴い建設された新館に、約300名が招かれ、第一



刺納衣を拝する参拝者(11月1日からは七条刺納袈裟と入れ替え)刺納衣は天台宗の始祖である天台大師智顛(538~597)の衣と伝わり、伝教大師が請来した日本最古の衣服。伝教大師が中国天台を受け継ぐことを象徴するこの上ない霊宝である

一巻 紙本墨書 平安時代(九世紀) 天台宗に関わる伝教大師自筆の六種の文書からなる。国宝となる人材育成を目指した「山家生主」が収録されており、まさに比叡山の至宝といえる。



国宝 天台法華宗年分縁起 伝教大師筆



檜の枝と聖徳太子

に延暦寺が創建される遥か昔からすでに比叡山は「神山」として畏れ敬わ

聖徳太子と檜堂

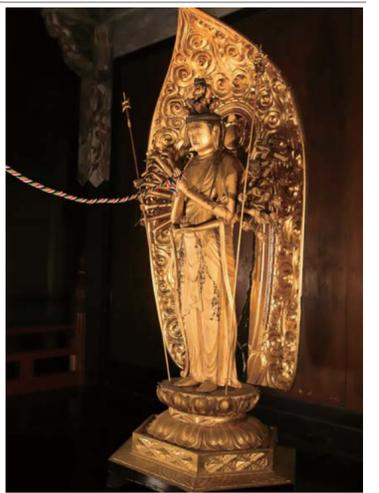
それらから遡ること約一世紀、今日における我が国の仏教繁栄の礎を築かれた聖徳太子(574~629年)は、飛鳥より祥瑞の光導かれ、この比叡山へご登覧されたと伝わります。



期間中には檜堂に僧侶が常駐して見どころを解説

その際太子は一本の檜の枝を杖としてお使いになり、登覧後の杖を地に突き立て残されたところ、杖から根が生え大木に育ったと伝わり、「檜堂」の堂名は、檜の大木の傍らに堂舎を建立したことに起因すると云われます。

わかりました。延暦寺には聖徳太子が念持仏とした「如意輪観音」像三体のうち、三寸(約9cm)の黄金一臂の金銅仏一体を二尺一寸(約63cm)の木造千手観音像に納め比叡山に安したの言い伝えがのこっており、「觀岳要記」にも檜堂の本尊について「如意輪、聖徳太子御本尊奉納腹心」と場として使用されてお



ご本尊の千手観音立像と納入されていた胎内仏(高さ約10cm、朝鮮三国時代伝来か白鳳時代に伝来仏を写した可能性がある・国宝殿にて拝観可能)

仏縁と歴史ロマンの檜堂

また、越前国一宮の由緒を持つ福井県敦賀の比叡山には、聖徳太子(574~629)に前述の藤原武智麻呂が「比叡山中で氣比神から寺院の建立を願われた」との伝承があり、比叡山は神が宿る神祕の霊場だった証左の一つとも考えられます。

本年は、伝教大師一千二百年大遠忌に加え、聖徳太子の千四百年御遠忌を迎えるという百年に一度の大勝縁の年です。また、国宝殿開館三〇周年という節目も重なり、それを機縁に比叡山延暦寺では、去る9月3日から聖徳太子ご縁の深い檜堂を開扉し、御本尊の千手観音菩薩さまを特別公開。また9月23日からは、国宝殿へ比叡山に由来する名宝にお帰りの頂き一堂に公開する、特別展「比叡の霊宝」を開催しております。そこで本号では、檜堂と「比叡の霊宝」展を通じ、開創前後の比叡山と、伝教大師入山後今日まで重ねられた圧倒的な歴史のロマンの一端をご紹介します。



国宝殿の外観

文化財ではなく「霊宝」 「見るでは無く拝んで欲しい」

ただ今、伝教大師一千二百年大遠忌と比叡山国宝殿開館三〇周年の節目となる勝縁を得て、9月23日から、比叡山国宝殿にて特別展「比叡の霊宝」を開催されています。今回最終的に伝教大師の至宝を「見るでは無く拝んで欲しい」と願っています。



根本中堂改修に伴い修理を終えた十二神将を期間限定展示



一体一体の仏像に込められた先人の思いを感じて頂きたい

中堂に所蔵されており、祖師先徳は私たちに何を託されたのかを自問する機会としていただき、「宝目録」にも見えるように、宝物は「霊宝」として「一隅を照らす」忘己利己、それを踏まえ字代学を連綿と伝えてきた先徳方の想いを心に刻んでいく、霊宝を前に「宗祖や